

宮座の社会学的一考察

——滋賀県野洲郡野洲町三上の事例——

徳川 真理子

はじめに

村落社会の生活を考えると、村落にある神社・寺院・社祠・佛堂・佛祠・神佛碑などの存在を無視することはできない。というのは、それらがただ村落にあるから無視できないというのではなく、村落を構成する人々とかかわっているからである。つまり、彼らによって祀られ、維持・経営されており、彼らの関心が直接的あるいは間接的な意味で、それに向けられており、彼らの生活の一部をなしているからである。それゆえ村落の生活を研究するとき、それらの祭祀組織は当然考察の対象となるべきであり、それらを対象としないで研究をすすめることはできないのではないかと考える。

ここで取りあげる「宮座」は、村落の内部にある祭

祀組織の一類型である。それが、家および家の互助組織を基礎単位として構成される村落社会においてもつ意味やその位置付け、さらにそれらがどのような役割や機能を与えられているかをここでは問題とするのである。特に村落の生活組織が急速に変容してゆくプロセスにおいて、村落社会が全体社会との関連をより緊密に深めながら、村落の統合性の問題を村落の一つの具体的な表象としての氏神鎮守^{注①}を媒介にして行なうのである。すなわち、その持つ諸側面の変化なども同時に考えるのである。

本稿は、以上のことを目的とする準備作業のひとつとして、昨年調査した滋賀県野洲郡野洲町大字三上の宮座組織について記述したい。

注①ここで用いる氏神鎮守とは、村落内にある多くの神社について、そのいずれにも用いるのではなく

く、村の神として、村の公共の建物で、その社会生活において切り離すことのできないもの。つまり、村人としての社会生活を営む限り、好むと否にかかわらず、その村の神の祭祀に参加するものである。従って、村落には必ずといって良いほどに、一つは存在し、しかも一つに限るものである。

一

ここにいる野洲町大字三上は、かつて琵琶湖の島であった丘陵と日野川・野洲川の沖積した平坦な扇状地平野から形成され、水利の便に恵まれた肥沃な水田地帯である。丘陵中には、近江富士の俗称をもつ三上山（四百二十八メートル）が存在している。この三上山は、これを神体山とする御上神社と共に多くの信仰の基盤となっており、この地域一帯の崇敬の対象となっている。

三上の村の変遷については、次のようである。^{注②}三上はかつて「庄」であり、その中に小中路・因幡・妙光

寺・前田・東林寺などの「村」があった。各々の「村」は、数人の地侍化した名主層と十数人の小百姓とで構成されていた。三上庄は「村」の連合であり、一つの惣であった。この庄の範域は明確ではないが、中世末の三上庄（現在の大字三上と妙光寺の地域）と近世初期の三上村は同一範域であり、その後の太閤検地・近世初期の検地（慶長七年）においても「村切」をしなかったため、従来の三上庄はそのまま三上村とされた。ただし妙光寺村については、一六六五年に三上村より分離独立したため、御上神社の氏子も離れ、この村だけで別に三上神社をまつり、祭祀組織も独自に形成していった。

以上はこの小論文にとって、重要な位置を占めるものである。

二

現在御上神社は、^{オナコラジ}大中小路・^{コナコラジ}小中小路・前田・山出・東林寺の五部落（氏子数二百戸）の中心に鎮座しており、これら五部落が連合して奉斎している三上村全体

の神である。その旧社格は、官幣中社であり、大正十三年に県社から昇格した。この祭神は天之御影命であるが、氏子間でそのように呼ぶ者はおらず「宮さん」とか「ミカミサン」というのが通称となっている。敷地は御上山の神社本道に向い、正面の十万五千坪と境内である。境内は、楼門内に本殿と三宮・若宮・大神宮が祀られ、楼門外には籠殿神社・鍵取神社・愛宕神社が祀られている。御上神社の御旅所は、東林寺部落の三大神にある。

官司は、昭和三十九年に赴任した新垣泰由氏であり、通称「グウジ」・「カンヌシ」である。また官司は、辻町にある三上神社を兼任している。主な行事は、年四回の祭典に出向くことである。宮には小使いがおり、これを通称「デイリ」と言う。現在これを勤めているのは、前田部落の市木新太郎氏である。

氏子総代については、任期二年、各部落より一名ずつ、合計五名が選出される。その内容は、部落を二分（一年目は、山出・大中小路・小中小路。二年目は、前田・東林寺）し、これを一年交代で勤める。氏子総代の主な仕事は、注連縄を作ることの他、官司の相談に

応じる等である。ただし大祭の時のみ官司・デイリ・氏子総代（自治委員のこと）五部落より五名・婦人会等の協力を得るのである。

ここで五部落および村の運営について図示しておく
五部落は、宮の連宮・山の管理・水利秩序においては連合して相互に有機的な結びつきを持っている。

今この社を中心とする宮座組織を見れば、五月十四日に春祭、十月十四日に秋祭が行なわれている。これについて、その宮座組織がどのようになっているのであろうか。

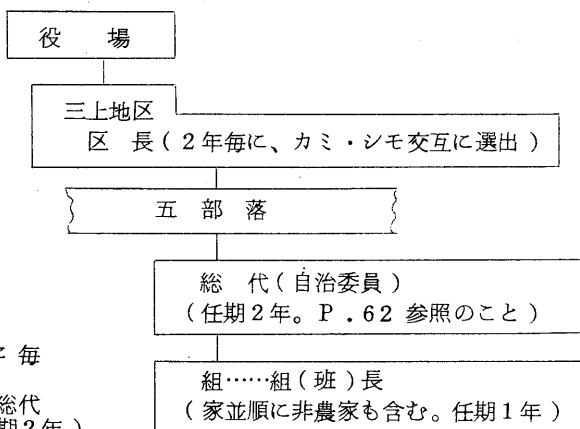
現在、御上神社の座は全部で三座ある。またこの社の氏子は三つの家筋により三つの組に分かれている。三つの座にはカミ座とシモ座がある。この座は「長之家（チョウノヤ）」・「東」・「西」である。ただし、長之家については、二十年前にカミ（上）座とシモ（下）座を合併させたため、神輿も一基しか出ない。詳しくは後に述べる。

祭の当番に当り得る者は、その座に加入している者の内で昔からの家順により（長之家）奉仕する者と、年長順により（東・西）奉仕する者とがある。この番

図 1

三 上	カミ	山 出 部 落 東 林 寺 部 落
	シモ	大 中 小 路 部 落 小 中 小 路 部 落 前 田 部 落

図 2



各 字 毎

・氏子総代
(任期2年)

・山の鑑守
(任期1年)

・水利委員
(任期1年)

⋮

カミ・シモより1名
ずつ区長より任命さ
れる

(4
組・
4
名)

・ (精米所) 作業所係

・ 種子・米袋の配有係

・ 税 金 係

・ 衛 生 係

注 これらについての詳細な説明は割愛させていただく。

に当った者を神事当番（シンジトウバン）とか神事番（シンジバン）あるいは頭人、本頭人、頭主などと呼んでいる。

長之家に属するものは、御上神社の子孫であると称しており、二十軒から成り立っている。これが三座の内首座で、神前で着座する時には、一番前に着座するのである。^{注④}

なお、各々の座には宮田のような特定の財産はなく、神事当番に当ったものが全ての経費を負担することになっている。ただし、秋祭の折には親類・縁者のつき合いの深い者よりその程度に応じて贈与がある。そのため、上座・下座各十軒ずつ、十年に一度の割合で神事当番を勤めることが経済的に困難という理由により、一年交代で当番を勤めるということになったのである。この時上座と下座とが交互に勤めるのである。

またこの座のものは、先祖代々より受け継いでいる座に着座している。この座に属する大谷家というのは、春秋の祭を通して重要な役割を果している。これについては後述する。

東に属するものは、土着の家筋と称しており、三上

地区の内百軒がこれに属し、長之家に次いで格式が高く、神前の座は長之家の後ろに着座する。^{注⑤}この座の神事当番になる順番は、先代の死後十六年から十七年後に勤める。また上座・下座のどちらに着座するかは、抽選により決定する。

西はその後村入りした家筋と称し、現在五十二戸から成り立っている。神前の座は東の後ろに着座する。^{注⑥}

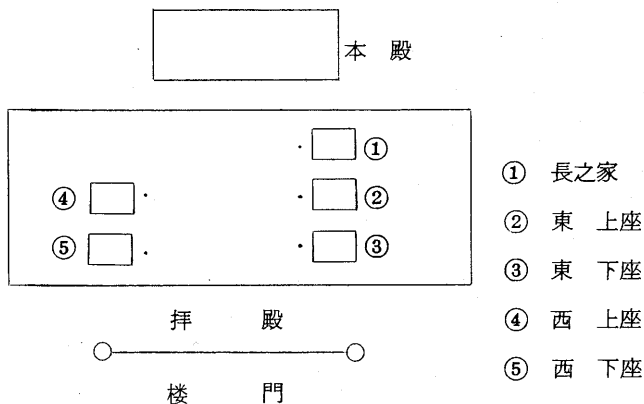
この座の当番を勤める順序は、東と同様に一代に一回であり、上座・下座のどちらに着座するかは高齢者が上座に着座するという規則がある。

以上三座の組織および座配の順序などより、村の構成の順序や村の生活における身分階層、位置などが示されているように思われる。^{注⑦}

また座配の上・下については、東・西に見られるようなものは最近の傾向であろうかと思われる。ただ長之家だけはそれを崩さず現在に至っている。

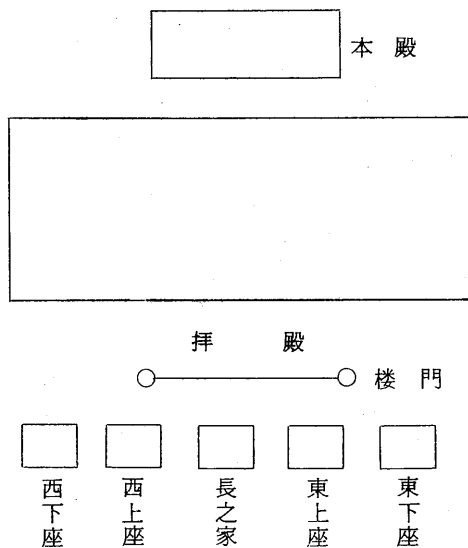
また以上三つの家筋と家の配列（地理的な）との関係はなく、五部落内に散在している。

図 3



(注) ・は頭人の着座する位置
□は神輿を置く位置

図 4



御上神社に属する宮座の神事は、一日一日の歳旦祭・氏子安全祈願祭から始まるが、現在宮座としては特別の行事をしなくなっている。そこで宮座の神事としてはまず五月十四日の春祭がある。

この祭は、五穀豊饒を祈る祭で、三上山のすその旅所にて神輿の渡御が行なわれる。神輿は三基あり、大宮・若宮・十禅師（三宮のこと）の三社の神輿である。現在は神輿が古い為担がないで、拜殿に飾るのみとなっている。しかし以前は、神輿かきの他に太刀持ち・獅子舞い・馬オイ・武者・警護等の行列があり、神輿かきと太刀持ちについてだけが部落単位の当番制であった。神輿かきについては、神輿を担ぐ権利を持つ家というのが決まっておリ、それは通称オモノと言われる古い家を指す。またそのような権利を持たぬ家は、オモノ以外の家であり、通称シンヤと言われる分家と他からの転入者を指していたようである。また太刀持ちについては、宮守をする宮侍の系統を引く家と言われる。これらは現在行なわれていないが、それに伴な

って存在していたオモノ講だけが、毎年二月九日に開かれていた。

オモノ講とは、オモノだけが昔から決まっている家順に従い、オモノ当番となりオモノ宿をする。そこにおいての費用（直会）はオモノ宿が負担する。

神輿を担ぐのに二つの組がある。それはセンジン組とゴジン組というもので、前を担ぐか後を担ぐかということである。従って大宮の神輿かきは四組から成り、センジン組十人、ゴジン組十人。若宮は大宮のようではなく、全部で十五人。十禅師は十三人である。この内十禅師の組では、山出と東林寺に分れてオモノ講を開いており、各々五軒ずつ、合せて十軒がオモノ当番をしている。このオモノにしても、五部落の中に散在している。なお神輿には田地が二反ほどついており、これをオモノ田と言う。そこで取れた米を当番が順にもらい受けて、講の費用とした。従って、講の残金は当番の手元に入ることになり、神輿かきを一つの財産とした。

ここで講と座との関係であるが、一般に座といえ^{注⑨}一村とか一族とか、いづれにしても集団的なものを基

盤にし、その上に成り立っているものであり、それに比べて講は、一般には各個人を基盤とし、各個人の意志で参加した集団とされる。その為座集団と講集団との間には明らかな区別が生じてくるのである。しかしいずれにしても、座も講も構成上の特殊現象をとらえて、その集団を表示したものであり、いろいろの集団現象を、その構成の面から名付けて区別し分類したものである。そのような集団に属する人々を指して、座であれば座衆・座人・座子・座仲間などといい、講であれば講衆・講中・講仲間などといっているのである。それらは家の互助集団の具体的な称呼であり、それらの称呼の間に必ずしも区別があるものではない。この問題については更に検討を必要とするが、ここでは割愛する。

今日でも三上のようなところにおける座は、中世的人格を持ち、地域的な性格が強く、^{注⑩}具体的には村の神を中心とする共同体そのものでもあった。従って村と称するものが、共同の生活を営む場であって、一種の座という形態をとっているのである。村全体で一つの共同体を形成すれば、村そのものが座でもある。村中

のものが村の神を中心に集合し、その行事の席に参加するという形は、座の最も典型的なものである。これがすなわち肥後氏の言う「^{注⑪}株座」であり、宮座の理念型^{注⑫}とも言えるものである。

オモノ講と座との関係は、前述の講と座を前提とすると、古い家同士が祭の時に特に強い結合をする。従って、村落内における他の者に対しては不平等閉鎖的であり、講成員内部に対しては平等開放的である。また後者については、家筋による村落における階級付けが行なわれる為、一層封鎖的・排他的性格が強められるのである。

四

頭屋になる行事は、東・西について述べると十月九日の甘酒呼びの日の朝、各々の公文で行なわれる。公文に行く神事当番は、その年から三年後（本頭人・介頭人・又介頭人）に勤める者で、^{注⑬}名前及び勤める年度を書き付けた半紙の八ツ切りをもらって帰るのである。長之家については、十月十三日の晩に公文より東・西

と同文のものを手渡される。これは神棚に貼っておく。

頭屋入りの神事が済むと、各頭屋は次のような任務

を果さねばならない。即ち一、三年後あるいは二年後、

一年後のハレの日^{注14}に^{注14}向けて頭屋が行なわねばならない

物忌生活である。二、ズイキ神輿を作る為の芋を作り、

それを成長させ、秋祭を待つ。三、かまどの修理・壁

の塗りかえ・床の張替えなど。これらは最底限度せね

ばならぬことである。四、家の建て直し。これについ

ては強制はしないが、経済的に余裕のある者が行なうの

である。ただしかつては大部分の家がこれを行なうと

いう風習があり、その余裕のない者は当番を受けるの

を辞退したという。五、十月九日までに提燈二個を作

る等。

また神事当番の順序が変更される場合は、神事当番

が予定されている家から葬式が出た場合に変更される。

長之家では、忌中の時には当番を来年に廻す。東では、

頭主が死亡した場合に限り、それが消滅し、葬式を出

した時には、来年に勤める予定の者が代行する。西で

は、忌中の時は来年に廻され、葬式を出した時には東

と同様、来年に勤める予定の者が代行するのである。

五

長之家・東・西には、各々頭となる公文（クモン）

が一軒ずつある。その中でも特に長之家の公文は総公

文とも言われる山出の大谷家である。当家はかつて御

上神社の社家をしていた家筋にあたり、御上神社が県

社に昇格する（大正十三年）まで神主を勤めていた。

東の公文は、大中小路の山崎家であり、西の公文は

大谷家（前述）が兼務している。

ここで長之家の座及び公文について肥後和男氏の見

解によれば次のようである。^{注15}チヨウノヤ（長之家）

の座ということから官座と荘園との関係を問題とし、

『チヨウノヤといふ言葉を始めて聞いたのは、滋賀県

野洲郡三上村御上神社の官座を調査した時であった。

一 中略一これらのチヨウノヤは前記の如く庁舎であろ

うが、これは何の庁舎であろうか。神社に關した言葉

であるから神社の庁舎であると考えられるが、そうす

れば今の社務所に當るわけである。』また公文につい

ては『公文がそこにあることを考へると荘園との深き

關係が予想せられる。しかも公文は文字通り公文を扱

ふ一種の書記みたいなおものであるから、文書の必要などころにはどこでもゐたわけであるが、地方にあっては田所などと並ぶ荘官の一種であつたと思ふ。そのやうな考に多少の根拠があれば、ここに宮座と荘園制の若干の聯絡が推測されるわけである。』つまり、荘園の政治組織と信仰組織との關係である。

公文の役割は次にあげる三つである。一、十月十三日晚の「トウワタシ（頭渡し）式」と十月十四日晚の「シバハラ（芝原）式」に立ち合うこと。二、長之家の場合、分家及び転入の場合にその家を座に入れるか否かを決定する権利を持つ。ただし東・西については規約は存在しないが聴き取りによると、分家に関しては何軒増えようと本家と同じ座に所屬を許すと決められており、転入者に関しては何年経っても神事を勤めることは許されないとしている。ただし参拝は自由である。

分家の入座については、分家した家の長は、本家の属する座の公文役と共に総公文役（大谷家）のところへ座入りの承諾を得る為に行く。三、神事を司る為の前準備として、三年後の神事当番を予め知らせておく。

これは当番を絶えさせぬ為に行なうのである。なお、公文役も神事当番を勤める。その時には、公文役は父親が、当番は息子が勤めるのである。

以上が公文の役割及び村落内におけるその位置付けである。村落社会において、この様な特権的な性格を持つ公文は、座の階層的分化を引き起してくる一方、村落全体としても排他的な封鎖性を持ち、同時にその内に存在する幾つかの座の間にも排他的に封鎖性の強い性格を形成することになるのである。

六

秋祭^{注⑬}は収穫感謝の祭で、通称ズイキ祭とかソウモク（相撲^{注⑭}）と言われ、十月九日から十月十五日までの一週間で、その九日は甘酒呼びと言ひ、当番家では甘酒を来客にふるまう。十日から十二日までの三日間は準備。そして十四日がズイキ祭、十四日晚が芝原式、十五日がツボソコである。一般にこの祭は個人の祭であると言われる。その内容については順に述べてゆく。

A、十月九日 甘酒呼び^{注⑮}

午前七時、本頭人は羽織袴で二三人の伴（親類の者に限る）を連れ、清酒（一合）、甘酒、メズシ一重、米一重、青漬一重を持参して社務所へ。ここで神事が開始されるという意味の奉告がなされる。それが終わりに次第本頭人達は、区長から預った鍵で郷倉にはいり、ズイキを乗せる神輿の竹の杵と木の台を受け取る。そこには六つの台が保管しており、各々の台（オカシモリ）には長之家上座・下座などと記されており、頭人の所屬する台を受け取る。一方、当番家では、麴屋（大中小路の山崎家）より買い求めた麴で甘酒を沸し、来客にふるまう。神輿を作るのは頭主やその家族の者ではなく、全て当番家の親類・縁者（約五軒）の協力によるものであり、夜さりで集まり、それを行なう。その時にも前述の甘酒・メズシ・青漬でふるまう。このメズシについては、当番家で作し、祭りの期間中ずっとそれを食する。

B、十月十一日 湯立式^{注19}

早朝、当番は、神社へ行き水を頂いて来る。その水をかまどで沸かしておく。官司は一日がかりで当番家五軒を廻り、その湯で湯立式を行なう。三上地区は図

1でも示すとおりカミ・シモに双分されている故、官司は毎年それを交代で廻る。湯立式を最初に行なう当番家は、神社へ道具を借りに行く。また官司が歩くところ（庭の中）へ新しいむしろを敷いておく。かまどで沸かした湯で屋敷の周囲を淨めた後に神を迎える。神は床の間の櫛に降りる。その後神と人との直会を催す。^{注20} 神の降りた櫛はズイキ神輿にさす。

C、十月十二日 ズイキ刈り

親類の男七人八人がズイキ刈りをし、それを川で洗い長さを整えて神輿作りに取りかかる。この時女は絶対にズイキ神輿に触れてはならない。女は主に台所仕事をを行なう。

D、十月十三日 オカシモリ

東の例を取りあげると次のようである。

公文はこの日二つの重要なことをせねばならない。

一、朝神社へ書付を持って行く。二、二年後に当番を勤める者に了解を得るなどである。

オカシモリとは、神輿の台のことである。当日は神事当番家に親類・縁者が集まり、神輿のつづきを作る。神輿を飾るものは秋に穫れたものを全て用いる。神

興の外側には棚を作り、一方にズイキで作った神社の鳥居と粟と相撲猿を飾る。もう一方にはアヤメ・モミジ・キクの造化を飾る。これらについては神社が一括して準備するが、昔は各家で用意した。御神体である柿は、神輿の上にさし込みその下を鶏頭の花で埋める。四方には、木で組んだところに胡麻・粟で糊付けした神社の釘抜の紋を、その下には柿を串す。祭の最盛日は十月十四日であるが、当番家の最盛日（ホンビ）となるのはこの日である。神輿が完成したら座敷に飾り、来客には膳でふるまう。この時女は台所と奥の間でそれを食べる慣習がある。

E、十月十三日 晩 トウワタシ 註②

各々の公文所（長之家・東・西）では一斉に頭渡しが行なわれる。それらを順に述べると次のようである。

△長之家の頭渡し▽

皆紋付・羽織袴で公文所へ集まる。頭人は三座とも酒一樽・メズシ・青漬・スルメ一束を持参した伴を連れ各々の公文所へ行く。公文の立ち合いのもと今年の頭人から来年の頭人へ当番の引き渡しを行なう。その時受け渡しの給仕は杯を廻すが、これは公文家の息子

が行なう。その順は公文から△今年の頭人▽△来年の頭人▽△再び公文へと廻り、その次に伴に持参させたメズシ等を受ける。その後もう一度杯が廻る。これらが終了すると公文より頭渡しが終了したという挨拶があり、他の部屋にて茶・菓子接待を受ける。

△東の頭渡し▽

羽織袴で今年の頭人と来年の頭人が公文所（大谷家）に寄り、頭渡しを行なう。各々の上座・下座の当番は伴にメズシ等（前述のもの）を持たせて行く。伴は当番を公文所まで送ると即帰ってゆく。長之家と同様に杯を廻す。また東ではこの時芝原式の給仕を公文の分家（シンヤ）に依頼する。給仕はジョウツカイ（定使い）とも言う。

△西の頭渡し▽

長之家・東同様、羽織袴で今年の頭人、来年及びサ来年の頭人、そしてその他の者（公文・給仕）は着流しで儀式を行なう。また伴にメズシ等を持参させて来るのは、今年の頭人だけである。全員がそろくと、まづサ来年の頭人を勤める者が上座・下座のどちらに座するかを決定させる。それは、公文が「上」・「下」

と書いた二枚の紙を折ったものを頭人に取らせる。座が決まると今年・来年の頭人および公文の計五名（各二座あり、頭人二名ずつ）で引き継ぎを行なう。この時伴と定使いのどちらかに給仕を頼み、もう一人は、メズシと青漬を配る役を頼む。杯を廻す順は公文から
△上座の今年頭人↓△下座の今年頭人↓△上座の
来年頭人↓△下座の来年頭人↓最後に公文へと廻る。この時、長之家・東同様に無言で取り行なわれる。これらが終了すると公文より頭渡しが済んだという挨拶があり、その後茶・菓子^{注22}の接待を受ける。

F、十月十四日 ズイキ祭^{注22}

午前十時、長之家の頭人が神社へ太鼓を叩きに行く。それを合図に各頭人はズイキ神輿を宮へ供えに行く。その行列に参加する人及び順は次のようである。頭人1敬護（羽織袴の小学生男子二名）悪魔払い、露払いの意味でバラ竹を鳴らしながら歩く。1神輿（親類の者二名が紺の半天に三尺を締めて担ぐ。1伴の者、と続く。神輿の通る道順は家毎に決っている。神輿は宮入りする前に神武天皇遙拝所にて、頭人五名、官司を含む神職三名、巫女三名、伶人八名、区長、氏子総代等の関係

者の前において祝司の奏上がある。宮入りの順は決っており、長之家1東上座・下座1西上座・下座の順である。また五基の神輿は桜門前に図4で示すように並べられる。その後図3のように神輿を奉納する。この時麻がら二束も奉納する。神社から、頭人へ神酒一升、かわらけ一枚が渡される。以上の儀式が終わると神輿は取り壊すのであるが、現在は（五年前より）駅前と役場に飾ることになり、二基だけ残す。

G、十月十四日 晩 シバハラシキ^{注23}

午後六時半、長之家の頭人が宮へ合図の太鼓を打ちに行く。午後八時から十時頃まで羽織袴で宮（桜門の外側）に集まり芝原式を催す。ここにいる芝原とは、頭人・定使い三名・官司・公文合せて十二名が着座する所にこもがコの字に敷かれているところからきたものである。官司とデイリは麻がらに火を付け、割木をたく。この芝原に着座する順は、デイリを先頭に長之家の公文1官司1長之家の頭人1東の公文1東の上座1同下座1西の公文1西の上座1同下座である。ここにおいても長之家の公文（総公文）は、座の中心に着座し、儀式の中心となっている。一方官司は、相

伴するだけで神事にはノータッチである。またこの場を取り仕切るのは宮のデイリであり、式終了まで無言で行なわれる。

デイリは「上」と記された文書を東の公文より総公文に渡す。西についても同様。その後、宮で準備したハナビラ餅をデイリが総公文―東の公文―西の公文―東の定使い―西の定使いの順に配る。西については、その時に餅を入れる籠を持参せねばならない。

次に定使いは、猿田彦の面をかぶり、芝原を二回廻り総公文の前で捧で突く真似をし、鼻糞を総公文にかけるしぐさをする。公文は頭を下げてそれを受ける。同じことを東・西についても行なう。その間各座毎に宴を開き、定使いは酒肴を配る。ただし東のみ鮎鮠を食べる。

最後に相撲行事が行なわれる。これは東・西の頭人の親類より子相撲（六・七才の男子二組）と大相撲（中学生から未婚青年までの男子二組）の力士を出す。力士は本殿に一礼し、ヤア、トウの掛声をかけ、形だけ二回組む。以上で祭は終了する。

丑、十月十五日 ソボソコ

夜、神事当番を勤めた家で、親類・縁者を呼び、残り酒で慰労と一年間の役を終えた喜びの直会を開く。以上が三上の宮座（株座）で行なわれる重な祭祀である。

七

ここで扱った宮座というのは、一、座は一座に同席して行事に参加することであり、それが同時に参加する人々でもある。それらの人々が特別なものとされるのは、その他の人に比べて特別な身分・家柄であるとされるからである。すなわちその座に着くほどの者をその他のものから区別する、特権的な資格と意識とを持ってゐる者としてゐるのである。ここにおいては当然村落内における階層分化が起つてくるし、またその他の村に対抗して村という意識の高まることなくてはならない。二、宮座は宮の座のことであるが、宮という場合には、一つの村には必ずあり、一つに限った鎮守の社、今日でいう氏神といつてゐる社を指す。従つて、八幡の座等のように他の神社の座を区別して、

氏神の座ということで、これは座の一類型である。三、寺院やその他の芸能の座や経済の座とは異なる、神社の座である。

村落に存する神社や社祠は、明治以降に限ってみても、国家的統制の厳しい影響を受けている。これは当然、祭祀組織および祭祀を中心とする事にも影響を与える。また同時にそれによって祭祀組織も変化してゆく。従って、村落の祭祀組織が、直接的に規制した国家による神社政策により、どのような変遷をたどったかなども今後の重要な課題である。

おわりに

本調査報告を作成するにあたり、三上の桑川夫妻には大変お世話になった。この機会に感謝の意を表したい。なお紙数の関係上、春秋以外の祭については割愛したことを断わっておく。

注② 社会伝承研究会刊『近江村落社会の研究』、一九

七六年、三一六・

③ 図1・2 参照。図2には聴き取りより作成。

④⑤⑥ 図3 参照、原田敏明、『村祭と座』、

一八二～一九四ページ。

社会伝承研究会刊『近江村落社会の研究』、一九

七六年

⑦ 山岡栄市、『農村研究の軌跡』、大明堂、一九七

六年 二九～三三ページ

社会伝承研究会刊『宮座の構造と村落』、社会伝
承研究Ⅳ、一九七四年、一七～二七ページ

⑧ 荻原龍夫、『中世祭祀組織の研究』、吉川弘文館、

一九六二年、第三章・第四章

講座家族2『家族の構造と機能』

坪井洋文、『家の習俗』、弘文堂、一九七四年、

第一節

⑨ 竹田聴洲、『近世村落の宮座と講』三一書房、

一九五九年

鈴木栄太郎、『鈴木栄太郎著作集Ⅰ』、未来社、

一九六八年、第五章

原田敏明、『村祭と座』、中央公論社、一九七六

年、座と講

米地実、『村落祭祀と国家統制』、お茶の水書房、

一九七七年、第二章

⑩宮座に含まれる要素は一、信仰の要素―信仰団としての性格を持つ。二、地域的要素―地域的集団をなす。三、系譜（特殊な家筋）的要素―系譜集団をなす。

⑪「株座」とは、その座に加入し参加し得る資格が、古来一定の家筋に属するものに限らるゝところである。即かかる家筋に生れたものでなければ座人座衆たる資格を獲得し得ないのである。従つてそれは極めて階級的な性質を有するものである。

「村座」とは、その氏子たる以上何人もかかる座に出席し得るものである。それは氏子としての平等性を強調するものであつて敢て家格の如何を問はず之に参加することを許すのである。

肥後和男、『近江における宮座の研究』第二章十九ページ。

⑫高橋統一氏の言う「株座であつて・当家制をもち（正式のメンバーは家長及び長男で）年齢階梯によつて組織される、神社の祭祀儀礼団体である」高橋統一、『民族学から見た日本』、河出書房新

社、「宮座制覚書」八二ページ

⑬「来昭和五十二己歳 本頭人 ×××

⑭聖川遊の秩序から次第に俗（仕事）の秩序が独立し、神聖（祭り）の時期と世俗（労働）の時期が一定の形で交替する。すなわち「ハレ」と「ケ」の交替の連続する生活である。ハレとは非日常的であり、「ケ」とは日常の生活をいう。

⑮肥後和男、『宮座の研究』弘文堂、一九七〇年、七六―七七ページ。

⑯肥後和男、『近江における宮座の研究』臨川書店、一九三八年、四一五―四二一ページ。

⑰肥後和男、『近江における宮座の研究』臨川書店、一九三八年、四一五―四二一 十行目

⑱十月九日 甘酒行事（献江鮭祭）：頭人心得より
抜

一、頭人ハ午前七時社務所ニ参集ノコト

一、頭人ハ左ノ神饌ヲ持参セラル、コト

一、清酒（一合）甘酒、めずし一重、米一重、青漬一重

一、頭人ハ羽織、袴着用供人ヲ具セラル、事

一、献江鮭祭ニ参列セラル、コト

一、祭典後菓子盛合及角力猿ヲ神社ニテ受取ラル
ルコト

①9 十月十一日 湯立式

一、早朝御手洗川ノ水ヲ汲ミ取ルコト、但シ容器
及杓ハ清浄ナルモノタルコト

一、湯立式刻左ノ如シ

午前十時ヨリ午後六時迄ノ間上、下ノ頭人
ヨリ交替に各家ノ道順ニヨリ奉仕ス

一、最初ノ頭人ハ社務所ヘ其ノ他後番ノ頭元ヘ使
ヲ差遣ハサル、コト

一、湯立式ノ神饌品及入用品左ノ如シ

稻穂一把、洗米五合、神酒一合、海魚、川
魚、野菜（二種）海菜（海台、昆布ノ類）

菓物、塩、麻草、半紙一折、表口、神衾、
床ノ間、籠 要スル注連縄

衾三尺位ノモノ二本 一尺位ノモノ数本

一、湯立式後ノ直会ハ成可ク簡單ニセラル、コト
一、湯立式ニハ頭人羽織、袴着用其他神事補助員

モ式ニ参列セラル、コト

②0 和歌森太郎、『神ごとの中の日本人』I 弘文

堂、九七二

②1 拾月拾参日 夜当渡し

清酒 壱升 但し二合瓶 芽寿し・壱重

青漬ぐさ一壱重

供同伴にて私方ヘ御持下さい 東公門所

②2 十月十四日 秋季古例祭当日

一、各頭人杜参時刻ハ午後一時長之家ノ太鼓ヲ合
図トシ自宅出発ハ午後二時半、祭典開始ハ午
後三時トス

②3 十月十四日 芝原式

一、午後六時半太鼓合図ニテ社務所ニ参集ノコト
一、芝原式開始ハ午後八時時間勵行ノコト
一、芝原式入用品ハ各公文ヨリ指定ノ通トス
附、神事振舞ノコト

本件ハ儉約ヲ旨トシ只管、至誠神明ニ奉仕ノ意
義ヲ主要トセラル、コト

竹田聰洲、『神佛交渉史研究』、吉川弘文館、一
九七二年、四三〜九九ページ。

中山太郎、『日本民俗学3』、大和書房、一九七
七年、一〇〇〜一二八ページ

（大学院修士課程）